

初期流産における流産時の状況と絨毛染色体の母体混入の可能性について

饒平名里美¹, 小林亮太¹, 水野里志¹, 辻勲¹, 福田愛作¹, 森本 義晴²

¹IVF 大阪クリニック ²HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】絨毛染色体検査の結果が正常女性核型（46, XX）と診断された症例のなかには、母体細胞の混入のため正確に診断できていない症例が存在する可能性がある。本研究は、絨毛染色体検査の結果と初期流産の状況の関連を検討することによって、絨毛染色体検査における母体細胞の混入を回避し、より正確な診断結果が得られるようにすることを目的とする。

【対象と方法】2012年1月～2019年12月までに初期流産のため絨毛染色体検査を実施した ART 妊娠 478 例を対象として、後方視的に検討した。はじめに、正常核型症例（139 例）と異常核型症例（331 例）間で女性核型の割合を比較した。次に、正常核型の 139 例を対象として、血中 hCG 値（<1000mIU/ml, 1000-2000 mIU/ml, ≥2000mIU/ml）と処置直前の胎嚢の大きさ（<15mm, 15-20mm, ≥20mm）をそれぞれ 3 群に分類し、各項目で群間における女性核型の割合を比較検討した。

【結果】女性核型の割合は、正常核型が異常核型より有意に高かった（68.3%（95/139）vs 51.7%（171/331）, $p < 0.05$ ）。各血中 hCG 値における、正常核型と診断された症例の 46, XX の割合は、<1000mIU/ml 群は ≥2000mIU/ml 群より有意に高く（ $p < 0.05$ ）、血中 HCG 値が低下すると増加した（<1000mIU/ml, 1000-2000 mIU/ml, ≥2000mIU/ml ; 85.7%（18/21）vs 72.4%（21/29）vs 61.0%（47/77））。胎嚢の大きさでの女性核型の割合は、<15mm 群で 15-20mm 群および ≥20mm 群より有意に高く（ $p < 0.05$ ）、大きさが小さくなると増加した（<15mm, 15-20mm, ≥20mm ; 84.1%（53/63）vs 52.4%（11/21）vs 56.4%（31/55））。

【結論】今回の結果から血中 hCG 値が低く、胎嚢の大きさが小さくなると母体細胞が混入している可能性が高いことが示唆された。これらの症例に対しては、次世代シーケンサーなどを用いた解析が必要であると考えられる。